

明治維新政府の宗教政策 (2)

——「日の丸」「君が代」の法案化についての 一考察——

上 村 敏 文

今日の日本人の宗教性がいかに培われてきたかを、主として明治期の激動の時代にあって当時の指導者達がどのような立場で、そしていかなるビジョンを有していたかを検証してゆきたい。

昨年八月九日、「日の丸・君が代法案」が可決された。本論文においては主として、歴史的、文化的側面から考察を加えるために、「日本人」「日本」というカテゴリーについて今一度整理をした上で、国家意識が世界的に強力になっていった明治期の若き新指導者達が、いかなるビジョンを有していたかを探究する。その上で、法案化された「国旗」「国歌」について、さまざまな意見が提示されてきたのであるが、それらを整理しつつ、若干の論評を加えたいと考えている。

(1) 日本人とは何か

日本人は単一の血統であるという幻想は、現代科学の最先端技術の一つであるDNA鑑定の結果、崩れ去りつつある。⁽¹⁾ 目覚ましい考古学上の相次ぐ発掘により、あるいは、歴史学、文化人類学、言語学等の諸領域においても、今までにもさまざまな推論や、学説が提出されてきていた。しかし、推論は推論でしかなかったのであるが、DNAによる鑑定によって、もはや推論の域ではなく、明白な事実として、日本人はさまざまな国、地域の人々の集合体であることを認識せざるをえない段階にきた。すなわち、中国大陸、朝鮮半島、東南アジア等の国々から、おそらくは何百年かにわたって、繰り返し移住がなされ、もともと日本に住んでいたと考えられる原日本人と混血、あるいはアイヌのような

先住民族を北方に追いやったと考えられる。

続日本紀(772)によると「他姓の者は十にして一、二なり」と記述してある。このことから何がわかるかといえ、すでに奈良朝末期において、当時の国家の中心であった高市郡では、人口の八割ないし九割が渡来人であったと考えられる。もし、これが事実であるとするならば、古代日本の首都的中心地のほとんどが漢氏や秦氏族の渡来人によって占められていたことになる。禪、密を総合して日本天台教学を確立した伝教大師(最澄)も、後漢の孝献帝の末裔である三津首百枝を父として琵琶湖のほとり滋賀郡に生を受けている。一方桓武天皇(在位781~806)も、天智天皇の皇孫白壁王と、百済系渡来人より出た高野新笠との間に生まれている。その天姿嶷然とした風貌、骨格、長身といった身体的特性も、生母より引き継いだものといわれる。平安京奠都後創建した平野神社は、渡来系氏族の氏神を祀ったものであるといわれており、調べたところ桓武天皇の母である高野新笠の先祖である百済聖明王の遠祖を久度神として合祀していることがわかった。したがって、天皇家の血統においてさえ、渡来人との混血が行われていたのである。

一方、神社が日本を代表する宗教とよく考えられているようであるが、調べて行くと、神社の多くは渡来人がもたらした宗教とも考えられるのである。ちなみに、山中順雅氏の研究によると⁽²⁾

宇佐八幡宮(加羅系)	約 25600 社
石清水八幡宮(加羅系)	約 25000 社
宗像神社(新羅・加羅系)	約 8500 社
厳島神社(新羅・加羅系)	約 8500 社
伏見稻荷大社(新羅・加羅系)	約 32000 社
諏訪大社(新羅系)	約 5000 社
日吉大社(新羅・加羅系)	約 3800 社
熊野那智大社(朝鮮系)	約 3000 社
津島神社(新羅系)	約 3000 社

八坂神社 (高句麗系)	約 2600 社
松尾神社 (新羅・加羅系)	約 1100 社

また、分社数は多くないが、出雲大社 (新羅系)、白鬚神社 (新羅系)、大神神社 (新羅系)、気多神社 (新羅系)、寒川神社 (新羅系)、上賀茂神社 (新羅系)、下鴨神社 (新羅系) も渡来人系神社として挙げられている。

このように見て行くと、古代からあるとされている神社は、明治以降に国家神道として創建された神社 (橿原神宮、明治神宮、その他植民地に創建した神社等) 以外、そのほとんどが渡来系神社ということになってしまうのである。この見解は、まだ一般的ではないが、私は現在のところ、これは支持できている。今後更に、検証してゆかなくてはならないが、司馬遼太郎氏の言うところである「可視的過去」を丹念に調査してゆけば、上記の結果は明らかになってくるであろう。

上智大学の名誉教授であり、カトリック司祭でもある門脇佳吉氏は、『日本の宗教とキリストの道』の中で「私は、キリストの教えがこの日本の地に根づくには、古神道を土台に据えて、新しく生まれ変わらなければならないと思います。」⁽³⁾と明言されている。この背景には深い意味が内包されていると考えられる。私は日本の歴史が古代において、想像以上に複雑な体系を持っているがゆえに、近代の国家神道ではなく、古神道を研究することにより、近隣諸国との関係がより明確になり、また現代われわれが「日本人」とよんでいる民族が、非常に多様性を有している背景が、少しなりとも明らかにされてくるのではないかと考えている。

(2) 「国歌」「国旗」法成立過程、成立について

穏健派を自認する私をして、今回の法案の成立過程には驚きを禁じえなかった。十分な議論がなされたとは言い難い中で、数の論理によるごり押しで、法案を通過させるやりかたは、到底民主主義の標榜するところからかけ離れていると断ぜられても仕方がない考えるのである。朝日新聞を検索してみると、

日の丸に関して332件（1999年7月9日現在）関連記事が掲載されており、その関心の高さを知ることが出来る。各界から反対意見が提出されているのは、いかに多くの人々が戸惑い、怒り、抗議を表明しているかが如実に示されている。

7月9日

- 「日の丸・君が代法案」の唐突 細川護熙（論壇）

7月10日

- 200人が反対デモ 日の丸・君が代法制化／兵庫

7月18日

- 法制化は人権問題／日本科学者会議島根支部

7月19日

- 日の丸・君が代法制化に反対／名古屋でシンポジウム

7月20日

- 日の丸・君が代法案，教員ら反対呼びかけ／岡山大教員学内集会

7月21日

- 日の丸・君が代法制化反対訴え集会／熊本

7月21日

- 日の丸・君が代，「強制許さぬ」／佐賀

7月23日

- 日の丸・君が代の法制化反対で集会 旧総評系労組／高知

7月23日

- 宗教者31人が反対する声明 日の丸・君が代法案／名古屋

8月4日

- 日の丸君が代の拙速な法制化反対 社会科教員ら108名声明／滋賀

8月5日

- 法学者212人が反対声明／奥平康弘東京大学名誉教授（憲法）他

8月7日

- 教授ら法制化反対アピール／北大，道教大，酪農学園大他61人教授

8月10日

●日の丸・君が代に混乱心配する声 県内の教員ら危惧／宮城

以上のように、連日のように反体声明が提出され、また各地でシンポジウム、反対集会等が、7月下旬から8月上旬にかけて実施された。そして、その後も引き続き反対声明が提示されている。反対声明を出すグループは、教員、労組、法学者そして宗教団体が大半を占めており、世論調査等では、「日の丸・君が代」を右翼系団体のみならず国旗、国歌として慣習的に容認している声もあることもわかっている。地方で育った私自身、学校教育を通して、違和感よりむしろ親しみを覚えている部類に属する。育った地域、学校でどのような教育を受けてきたかに、大きく関わってくることであろう。

昭和60年(1985)4月26日、文部省初等教育局長名で、各教育委員会に対して、各学校の特別活動の調査を求め、この中で卒業式・入学式等における「日の丸」「君が代」の扱いについても調査している。同年春の卒業式において、「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱の状況(%)は、

	日 の 丸			君 が 代		
	小	中	高	小	中	高
北海道	77.8	80.5	95.2	20.4	16.9	26.6
青森	98.2	99.5	97.1	94.7	97.1	89.7
岩手	98.0	98.7	100	95.4	89.5	100
宮城	99.1	99.5	81.0	98.7	99.5	48.1
秋田	97.4	98.0	100	69.4	74.8	100
山形	98.7	100	100	71.0	75.8	37.3
福島	99.8	99.6	96.6	99.3	96.4	59.8
茨城	99.7	99.5	97.1	97.5	96.8	84.3
栃木	99.8	98.8	100	99.6	99.4	100
群馬	98.6	98.3	100	94.8	87.3	98.6

埼玉	97.6	95.2	48.6	86.6	78.6	9.7
千葉	99.5	99.1	89.9	96.8	97.0	60.5
東京	93.1	92.4	37.8	69.1	61.7	4.5
神奈川	80.0	87.2	43.6	48.8	50.0	4.5
新潟	99.6	99.6	67.0	99.7	96.8	12.3
富山	100	100	100	100	100	95.2
石川	98.3	99.1	100	82.8	76.4	43.8
福井	99.1	100	96.6	99.1	100	93.1
山梨	95.3	97.9	100	80.7	80.4	100
長野	92.9	92.1	15.3	7.8	6.8	0
岐阜	100	100	100	99.5	99.0	97.8
静岡	99.4	100	97.9	98.1	98.1	76.3
愛知	100	100	100	99.6	100	99.3
三重	90.8	92.0	83.9	37.5	31.4	5.4
滋賀	92.6	86.8	86.8	44.2	28.6	2.6
京都	76.9	74.2	9.5	0.7	0	0
大阪	55.8	53.0	85.2	18.3	10.7	0
兵庫	93.4	87.4	92.1	48.0	52.3	41.7
奈良	95.3	84.3	85.7	81.0	59.8	51.4
和歌山	98.0	97.3	71.1	33.9	25.0	0
鳥取	98.9	100	75.9	94.5	89.3	10.3
島根	99.4	100	97.6	97.1	96.6	97.6
岡山	99.6	99.5	98.6	94.5	91.8	90.1
広島	79.7	76.7	31.2	32.7	14.3	1.1
山口	100	100	100	99.2	99.5	100
徳島	100	100	100	100	100	100
香川	100	100	100	100	98.8	97.0
愛媛	100	100	100	100	100	100

高知	45.0	45.7	73.2	26.3	25.0	12.2
福岡	97.2	89.1	100	80.3	56.2	96.3
佐賀	100	100	100	97.5	97.9	89.2
長崎	99.8	99.5	100	99.5	99.5	100
熊本	100	100	100	98.3	99.1	98.3
大分	93.2	90.2	100	72.6	71.4	96.4
宮崎	100	100	100	100	100	95.2
鹿児島	100	100	100	100	100	100
沖縄	6.9	6.6	0	0	0	0

前節において、日本の多様性ということに触れたわけであるが、この調査結果一つをとってみても、その地域差の相違が際立っていることがわかる。概して、西日本において「日の丸」「君が代」の実行率は高くなる傾向がある。特に、「日の丸」デザインの発祥と思われる鹿児島においては、小、中、高校を通じて完全実施されているし、「君が代」の歌詞のモデルとなったといわれる薩摩琵琶の関係からか、やはり鹿児島において完全に実施されている。沖縄のような第二次世界大戦、あるいは江戸期の薩摩による併合など、特異な歴史を持っている県を除くと、「日の丸」掲揚の実行率は全体的に高いのであるが、「君が代」の方は、特に高校の段階において実行される率は、相対的に低くなるようである。顕著な例として、長野、京都、大阪、和歌山そして沖縄が高校においては斉唱されていない。ところがこの調査が行われた後、各教育委員会を通じて指導が行われ、2年後の調査では、ほとんどばらつきがなくなり、沖縄においても90パーセントを超える実行率となった。⁽⁴⁾この度の、法案通過によって、限りなく100パーセントに近づくことは間違いないことであろう。

この度の「君が代」「日の丸」の法案の背景として、直接的には広島県の県立高校校長の自殺という、痛ましい事件がきっかけになっている。また、政府の答弁でも、教育現場の混乱を解消するためという理由づけを繰り返すばかりで

あった。そして、連立内閣による多数決の論理で押し切ったのが、今回の顛末である。現在の民主主義のルールからすると主権者たる国民の代表である国会議員が、唯一の立法機関としての国会で正式な手続きで可決したのであるから、問題はないといえはその通りであろう。そして、おそらく今後先の調査からも明らかのように、次第に教育現場においても実行率という数字の上ではパーセンテージは上昇するであろう。しかし、依然として不満が残り、少なくなってきたものの、マスコミにおいても反対の論調が続いているのはなぜであろうか。ものごとの本質というものは、学べば学ぶほどわからなくなってくるものなのかもしれないが、「日本」「日本人」ということを研究するようになり、この問題についても考えるようになり、少なからず私自身混乱をきたしていた。いや、今でもまだその状態から抜け出ているわけではない。

自国の国歌、国旗を誇りに思うことができない状況というのは、不幸だと思う。将来、世界が完全に一致して世界連邦のような存在が形成されれば話は別だが、現在の国際状況は、やはり「国家」の存在を超越できる段階にはきてはいない。昨年、フランスに行き日本大使館の前を通りかかった時、日の丸がなんとなくよれよれで、白地の部分が埃や、排気ガスで汚れているように見えた。隣のアメリカ大使館や、イギリス大使館の国旗が清潔に元気よくはためいているのを見たとき、やはり複雑な思いにかられたのも事実である。あるアメリカンスクールの校長先生が、「(日本では) どこにいても国旗がはためいていない。」ということをして、日本で最もフラストレーションを感じた第一に挙げていらっしゃることは、全く予想もしていなかっただけに、いまでも鮮明に覚えている。

ある意味において戦後世代、しかも高度成長期に生を受けた私などは、国家意識、あるいは戦争責任については随分と意識が希薄になっているのかもしれない。しかし、世代によっては、日の丸、君が代が、戦争のイメージと直結し、あるいは近隣アジア諸国の中にも同様の象徴性が宿しているとすれば、やはりそれは国民全体で納得のいく形で議論し、方向性を決定すべきであったのではないだろうか。

国民の代表である国会議員が、唯一の立法機関である国会において、決めたことだから法的には問題がないのかもしれない。しかし、マスコミで多々報道され、また法律関係者、学者、教育者、宗教界から反対意見が表明されている現実をみると、やはり納得のいくことではない。数合わせの、政治の暴力であると言われる所以であろう。ただ、ここで留意しなければならないことがある。日の丸・君が代反対の声が、どうも国民的運動となっていないように思われることである。歴史を遡るならば、豊臣秀吉の宣教師追放から始まり、江戸幕府の徹底的な禁教により、日本のキリスト教が壊滅的打撃を受け、鎖国時代の二百数十年もの間、隠れキリシタンとしてしか信仰をまもることが許されなかった時代が事実あったわけであるが、この間、日本人はお上のいうことはなんでも無批判にきいてしまうという習性が染みついてしまったのかもしれない。今年春の卒業式には各地で、幾つかの混乱も生ずるであろうし、それに対して「強制しない」といいつつ、次第に圧力は増してくることは十分に予想できることである。

司馬遼太郎氏が『「明治」という国家（下）』（NHKブックス）の一番最初に明治国家とキリスト教について取り上げているのであるが、「キリシタンはおそろしいというのは、江戸期二百数十年のあいだに、日本人の心にしみこんだものでありました。むろん、幕府の政策によるものです。幕府の最高の禁制が、国外に出ないこと（つまり鎖国）とキリシタン禁制でした。キリシタンであることがわかれば、火あぶりの刑に処せられてしまいます。『キリシタンは国を売るのだ』とも、江戸期の多くの日本人は思いこんでいました。」⁽⁵⁾ 現在、このような偏見を持つ日本人はむしろ少ないと思うのであるが、歴史に刻印された過去が百年そこらで封印出来るものかについては、私は多少の危惧を持っている。明治以降の宣教師の活躍のおかげで『クリスチャン』といえ、まじめという印象を重ねます」⁽⁶⁾ というのが現在のキリスト教徒のイメージであれば良いが、「あいつらは、『靖国法案』の時もそうだったが、いつでも反対ばかりしているやつらだ」という印象を持たれることを、逆に私は危惧する。

ある学生が、地方に転校したとき「君が代」を歌わず、同級生から「非国民」

と非難されたということを聞いた。あるいは、ある国立大学の老教授が「(私は)クリスチャンは今でもスパイだと思っている」とおっしゃったのを聞いて、驚くと同時に現代の日本においてさえ、いまだ江戸、明治をひきずっているのかもしれないと思った次第である。

ここでは、結論は出せないが、私たちは、今回の法案通過に対して、一つの現象としてとらえるのではなく、歴史的、文化論的、神学的観点から、複合的に判断してゆかなければならないと考える。と同時に、日本におけるキリスト教伝道という立場から、日本の文化、仏教だけではなく儒教、道教、神道についても学ぶ必要がやはりあると痛感するのである。さらには、丸山真男氏が「日本にはマルキシズムとキリスト教は絶対に入らない」⁽⁷⁾と明言されたそうであるが、そうならないためにも、慎重に議論を重ね、研究を積み重ねると同時に、一切を「無構造化」するあるいは「変容」させてしまう日本の宗教風土を検証しなおす時期にきていると思うのである。

注

- (1) 『科学朝日』編『モンゴロイドの道』朝日選書523第6章ハイテクで見る「日本人の起源」ミトコンドリアDNAから探る人類集団の系譜, p 140-150
- (2) 山中順雅『法律家のみた日本古代千五百年史』古代天皇制誕生までの過程, 国書刊行会, p 136-138
- (3) 門脇佳吉『日本の宗教とキリストの道』岩波書店, p 3
- (4) 沖縄では国体開催ともからめて「日の丸」「君が代」の実行率を上げるための指導がなされた。他県においても、同様に実行率の低い所は、県教育委員会を通して徹底を図っている。また、臨教審第四次(最終)答申では、教育の基本的在り方の項で「日本人として、国を愛する心をもつとともに、狭い自国の利害のみで物事を判断するのではなく、広い国際的、人類的視野の中で人格形成を目指すという基本に立つ必要がある。なお、これに関連して、国旗・国歌のもつ意味を理解し尊重する心情と態度を養うことが重要であり、学校教育上適正な取扱いがなされるべきである」と答申している。
- (5) 司馬遼太郎『明治という国家(下)』NHKブックス, p 11
- (6) 同上, p 44
- (7) 門脇佳吉『日本の宗教とキリストの道』岩波書店, p 9